

## またたく間に

田 多 英 興

まずは、「またたく間に」というタイトルにさせてもらいました。とい  
いますのは、「白鷗の世話になって、あっという間の3年間だった」とい  
う意味が第一なのですが、加えて、私の研究の生涯最大のテーマが、ご存  
じのように「まばたき（瞬目）」だからという意味もあるからです。本当  
にあっという間です。そして、こういう機会を与えて下さった白鷗のすべ  
ての関係者にお礼を申し上げます。ありがとうございます。何度お礼を申  
しあげても足りないくらい感謝しております。たった3年間なのに採用し  
てもらったこと、その3年間のすべてが楽しい思い出で満ち満ちているこ  
と、先生方とも、事務職員の方々とも、学生諸君、とりわけ心理学専攻の  
学生諸君とは本当に楽しい教員生活を満喫させてもらいました。嫌な思い  
出は一つもないくらいです。歳のせいかもしれませんが、本当に楽しいと  
いうか、嬉しい思い出しかありません。40年を超える教員生活の総決算と  
してはこれ以上ない時間でした。心から感謝いたします。そこで、本学を  
去るにあたって、学生諸君へ若干の思い出を残しておきたいと思います。

この3月で社会的活動すべてから引退することになります。アメリカで  
世話になった教授からは「Second Retirementおめでとう」と言われまし  
た。Congratulationなのです。思い返してみますと、長いようで短い70年  
だったように思います。1940年に雲崗石窟で有名な中国山西省の大同市で  
生を受けました。父は晋北政府という当時の傀儡政府の役人でした。役人  
でしたからこの山西省の色んなところを転々として、最終的には1945年の

終戦の翌年の正月に父の故郷である九州に引き上げてきました。九州の大分県の田舎町（昨年久しぶりに行きましたが、酷い過疎の村になっていました）で小学校（最後の「国民学校」一年生でした）、中学校、高校と過ごして、一年浪人した後仙台の大学に入学します。その後、仙台に10年、福島に12年、秋田に9年、再び仙台で17年、そして小山で3年間を過ごして、今年めでたく古希を迎えた次第です。

小中学校時代は、引揚者ということもあつたし、ちびで、神経質で、愚図で、ひ弱な男の子であった私は、かなり所謂いじめにもあって、闊達な時代を過ごしたとは言えません。でも、今も濃い関係が続けてくれる2人の友人がいることと多くの親類がいますから、この故郷はかけがえのない大事なものです。高校時代は、田舎だし、まだそれほど受験戦争の厳しさの無かった時代ですから、比較的いい思い出が多いのです。父の母校である旧制中学の伝統を受け継いだそれなりの進学校の高校でした。その時の恩師の一人が国学院大学の折口信夫（釈超空）の弟子で学問的雰囲気を匂わせてくれたものですから、田舎者の高校生はこの先生に私淑して、考古学（化石掘りや土器の再生など）や民俗学（古老の昔噺の収集など）の真似ごとに熱中していました。受験勉強そっちのけで夢中になり、似合わないのにこのクラブの部長をやりました。したがって、このクラブ活動は私の高校時代の最大の思い出です。スポーツは全くの音痴で何も出来ませんでした。その他に理科と数学もダメでした。特に数学は高校に入学しててに実力試験がありその時に17点だからって、上位20位くらいに入った奇跡が一度だけありましたが、その後はほとんど有効数字が出たことのない成績でした。理科はある程度暗記すればいい科目もありましたから、学期試験に受かる程度にはやりましたが、基本的には興味はありませんでした。ひたすら本読みで過ごしていたみたいです。

そうやって無為に過ごしていた報いで、大学受験の初年度は何も目標もないものですから、何となくある国立大学の法学部を受験して、見事に失敗しました。3カ月ほど熊本の親戚のうちで厄介になったのですが、その

伯母も持て余したらしく、両親は苦勞して9月からは京都の予備校に入れてくれました。京都では小学校以来の生涯の友人である二人の友人と一緒にでした。翌年仙台の大学に入りました。これは運としか言いようがない幸運さでした。その3人の中で、私だけが愚図で、とても京大に挑むほどの力がないことがはっきりしていましたから、北大を目指したのですが、結局従兄弟の一人が東北大学にいましたので、仙台にしました。二人の友人のうち一人は京大の法学部に、もう一人もとても力があつたのですが、その年も京大を失敗してある私立の大学の理科に入りました。

大学に入ってからいわゆる教養部の時代は、今思い返しても、人生の華の時代でした。旧制二高以来の古い寮に入って大学時代を楽しみました。この時代の友人も多い。実に楽しい時代でした。青春そのものでした。もう一度やり直すことができるならやはりきつとこの時代を選ぶでしょう。田舎者でしたからあらゆることが新鮮で、特に大学の講義はすべての講義が面白く、面白くないものはあまりありませんでした。ただ、「体育講義」と「体育実技」が全学必修だったことは心外でした。スポーツ音痴の私としては体育が嫌いだから大学に来たのに、どうして今更体育をやらなければならないのか、大いに不満でした。心理学専攻にだって必修という科目はなかったのに、なぜ体育なのか、と思いました。GHQの意向らしかったのですが、今は必修からは外されているみたいなので、安心です。勿論、体育がいけないと言ってるわけではありません。好きな人が楽しむとか、専門家が修練するということはある得ることでありますが、普通の人が必修で修めなければならない科目とはとても納得できませんでした。これは今もそう思います。全学必修にするなら、先ず第一に哲学、もうひとつ加えれば英語くらいです。英語も昔のインテリたちにとってラテン語が共通語だったという意味であって、英米系の文化の理解が必修だという意味ではありません。スポーツに通じるのは健康にいいことではと思いますが、間違っってプロなどになるものなら、長生きさえ期待できないではないか、などと理屈をこねていました。

学部の恩師北村晴朗先生は「自我心理学」の本邦における草分けで、自然にその影響を受けていきました。今も私の担当する教養課程の心理学の最後の講義は、「自分とは、私とは何か」についての省察の一助にすることを目指して、Y G という性格検査を通して、「自己像の検討」ということで締めくくりにしています。心理学の最終目標はやはり自分とは何か、ということだと思うからです。とは言いながら、片方では、「科学とは何か」という疑問に取りつかれて、寄ると触るとこの議論をしていた気がします。特に後に社会心理学で名を成していく友人とはよく議論をした記憶があります。しかし、この疑問を持つことになると自然に理科系にその範を求めることになり、次第に臨床系よりは実験系に興味が移って行きました。厳密な科学の方法を心理学の中で確立するにはどうしたらいいのかということです。そこで、学部の卒業論文も大学院の修士論文も当時（といっても肝心のアメリカでは既に過去の遺物になっていたらしいのですが）いわゆるNew Look心理学と言われた知覚・認知における主体的要因の影響のようなことを実験的に検討していました。教養課程の頃に凝っていた哲学の認識論への思いもあったと思います。

修士を終えて先輩の誘いに乗って出来たばかりの医学部の研究所の助手になりましたが、うまく適応できずに1年で文学部に逃げ帰りました。そして、博士課程をちょっとやって、今度は文学部の助手をやらせてもらいました。この間はずっとネズミを追っかけていました。しかし、結局ネズミの論文は一つもできないまま、恩師の実験を手伝うことで終始しました。最初のころの論文はしたがってすべて共著で、主に英語で書きました。東北大文学部の心理学には本邦で一番古い外国語（最初のころはドイツ語の論文の方が多かったみたいですし、私の恩師も英語よりはドイツ語で書く方が楽のようでした）の論文だけの雑誌（Tohoku Psychologica Folia）を持ってましたので、必然的に英語で書く破目になりました。でも、この時英語で論文を書いた経験は後々大きな影響がありました。と言いますのは、日本語でアウトラインを書いて、それを英語に直すのですが、英語になっ

た時には元のものとは似ても似つかぬ内容になって、一体何を言いたいのかすっかり混乱してみたり、その過程で自分の日本語がいかにか非論理的であるか、ということの思い知らされたからです。日本語での論文作法にも強い影響を与えました。学生諸君にも、あるいは研究者を目指す人にも、英語で論文を書く機会を持つことをお奨めします。日本語が良くなるからです。

文学部助手を終えると、福島医大に赴任することで、正式の自立を強いられました。医学部の教養課程の教師稼業はほとんど「王侯貴族の生活」でした。通年1コマ半の授業が義務で、付属する看護学校の心理学の授業（半期1コマだったような気がしますから、通年2コマが義務だったか）が半義務でしたが、これはバイト料が出ましたので、動機づけを高めるには十分でした。残りの時間はほとんど自分の時間で、しかも規模の大きい医学部のおこぼれをもらえますから、研究費も不満に思ったことはありません。科研費などはその存在さえ当時の田舎大学の教師はよく知りませんでした。しかも、まるで必要性も感じないほどでした。しかも、実験実習を担当していましたから、実験室も十分な広さで独り占めできたのです。時に、例えば法医学の教授が毎年司法修習生のための私の実験室を使って研修をするなど、基礎系の教授たちが使うことは時にありましたが、ほとんど一人で使っていました。

おまけに、生理学と衛生学の教授がとても可愛がってくれて、特に生理学の塚原進先生からは最終的に学位をいただくことになる大恩ある先生になりましたが、衛生学の星島啓一郎先生（衆議院議員の議長をされた方のお子さんです）も研究室の引っ越しをした時にわざわざ自分の実験室を明け渡してくれて、心理学の実験室を提供してくれましたし、暇ができるといつも一人である私の部屋に寄ってきて色々な話をしてくれました。これも懐かしい思い出です。もともとアメリカに馴染みのある先生だったらしいのですが、その頃から、アメリカ人がよくやるように、一年中半袖で過ごしていました。晩年はハワイでお過ごしのような感じでした。

しかし、この恵まれたこの時代に、私の人生の中で最大の危機が訪れます。ユングの言うまさに「中年の危機」だったのだと思います。医大に移って、結婚もし、恵まれた研究生活を送っていたのですが、内実は実に惨めな生活で、本当の意味で自立を求められて、オロオロしていたわけです。ネズミの実験は条件的に難しいということもありましたので、諦めました。一人でやれる研究となればやはり知覚系の実験になります。幸いなことに、生理学の教室に通うことを許されていましたので、そこで基本的な実験的手法の勉強をさせてもらいながら、自分なりの生涯の仕事のテーマを探していました。しかし、いつまでたっても「芽が出ない」、確信の持てる研究にたどりつかない、という焦りで、最終的には、大学を辞めることも本気で考えるほど悩みました。しかし、やはり結局はそこまではいきませんでした。一つは、本気で家内に話したはずなのに、家内からはけろっとして「どうぞ」と言われてしまったこと、もう一つはユングの言う布置（Constellation）に巡り合っていたこと、の理由です。前者は無論自分ひとりのレベルでは人生をかける大決心のつもりでいたのですが、妻からみればそう大きな問題ではなかった、ことに気づかされたことです。冷静に対処しないといけない、と冷や水をかけられた思いでしたし、女性の肝っ玉を感じさせられて、今も感謝しています。後者は少し説明が必要でしょう。

この布置というのは人生の岐路に立った時、しばしばいくつかの選択肢が用意されていることを意味するようです。私の場合もまさにその通りで3つの選択肢を選べる機会を与えられました。一つはユング心理学、2つ目は肢体不自由児の心理学、3つ目は瞬きの実験心理学で、最終的にはこの後30年を超える時間をかけて取り組むまばたき研究にたどり着ききっかけになりました。

ユング心理学との巡り合いは、福島市役所の係の人が来て、「市の主催で今年河合隼夫先生のユング心理学について勉強会をすることになった、ついてはそのコメンテーターをしてくれないか」という依頼がありました。

全くの素人の私がそんなことはできないと断ったのですが、その方は大学の同窓生だったせいもあってか、そんな難しく考えなくていいからやりなさい、ということで結局引き受けました。1972年の冬に河合先生が教育テレビで24回連続のユング心理学の講義をされました。そのビデオをめぐるみんなで討論をしよう、というわけです。いくら市民でもやはりかなり勉強していかないと納得してもらえないと思い、当時売り出されていたユング関係の本、河合先生の本は多分ほとんど全部手に入れました。全部読んだ、という自信はありませんが、かなり本気でかなりの量読みました。今までやってきた実験心理学とはまるで違う、心理学の中でも最右翼にある思想で、しかも難解で知られる学説です。大いに苦勞して読みましたが、辛かったことはありません。数年間、楽しみながら市民の人たちのお相手をしながら、自分も勉強しました。

第2の選択肢は、ある時当時福島大学教育学部の教授をされていた片岡義信先生という大学の先輩に呼び出されて、来年から「肢体不自由児の心理学」を担当しなさい、とほとんど命令されました。特殊教育（当時はこう呼んでいました）などまるで素人ですから、これまた大いに困惑しました。しかし、いい機会かな、という思いもありまして、素直を受けて、その後何年間か秋田の大学に移った後も集中講義を担当させてもらいました。この領域では、当時九州大学の成瀬伍策という先生を中心に、「動作法」という極めて独創的な治療法を開発されていましたので、これの勉強をしないと一人前ではないと思い、1978年（学位をもらった年）の夏に11か12日間の研修会に参加して、勉強しました。これも極めて新鮮で、脂の乗り切った成瀬先生のそばで勉強させてもらいました。私自身はこの1回だけで終わってしまったのですが、動作法自身はその後さらに発展して、今は運動障害以外の臨床の他の領域にも適用されていて、日本を代表する独創性の高い、輸出の出来る臨床心理学の技術として発展しています。

第3の選択肢は、ずっと出入りさせてもらっていた生理学の教室を主宰されていた塚原先生が、NHKから基金をもらってきて、「テレビ番組の客

観的評価」の方法を開発する課題を与えられて、このお手伝いをする事になりました。そこで、その教室の若い人たち5人くらいでさまざまな生理指標（脳波、筋電図、眼電図、心拍、皮膚電気反応、酸素消費量など）を検討したのですが、一向にはかばかしい結果を得られなくて、みんなで頭を抱えていました。私もどうしたことかと日夜考えていました。が、ある時、あるイギリスの高名な心理学者（R. L. Gregory）の論文を読みましたら、まばたきを利用していることに注目したのです。この高名な認知心理学者はまばたきの実験もいくつかしていました。それに触発されて、早速塚原先生のところに飛んで行って、提案をしたら、すぐに取り上げて下さいました。最初は多分あまり成果を期待していなかったと思います、私自身もそうでしたから。でも、とにかく何かやらないと結果が出ないのですから、やるしかなくて、決行しました。ところが、これがまた丸で予想に反して結果はきれいに出来ました。複雑な生理指標を操作するよりは、簡単な何の道具立てもなく出来る指標の方が返って有効だということを思い知らされました。つまり、問題に応じた答えが用意されているので、いたずらに精密さを追い求める愚を実感させられました。

そこで、調べてみると、眼瞼の開閉だけ、というこの単純な振る舞いについては、どうもあまり研究が進んでいないことが分かりました。生理学と心理学とでかなり違う扱いをされますが、いずれにしてもその機構の詳細については未知のことが多いことが分かりました。反射性の瞬目については、心理学の中では条件づけの文脈で相当に扱われてきて、かなりの成果が蓄積されていましたが、その時代はすでに終わり、次の認知全盛の時代に移行していましたので、新しい解釈なり意味づけなりが必要な時代になっていました。それには、学生時代に扱っていた認知の文脈でこれを扱うことが有利になることも興味を引いた元のひとつです。

この3つの布置の中から一つを選んで自分のこれからの後半生の専門にしなければならぬと感じていました。後で考えると必ずしも一つに限る必然性はなかったのですが、当時はとにかく一つに絞って目標を明確にし



ようという思いが相当に強かったのです。そこで、この3つを比較すると、一番先に諦めたのはユングでした。恩師北村先生の授業でもしばしば出てきていて馴染みのあったユングでしたが、同時にその難解さには恩師でさえ恐れをなしていましたし、自分である程度読み進むにつれて、私ごときがおいそれと料理できる主題ではないことを実感することになりました。続いて、動作法ですが、これはかなり手頃なテーマだし、この成瀬一派の仕事には僕も当時から瞠目していました。35年も前のことですから、この時期から成瀬先生に私淑して発展させていればかなりのところまで達した気もするのですが、これを深める機会を狙っている間に、より容易に取りかかれるまばたきの研究に引きずられることになりました。

まばたきで最初にしたのは前述のテレビ番組のまばたきによる評価、ということでしたが、続いて速度見越し検査という知覚運動全体を含めた行動の眼球運動とまばたきから見た解析になりました。速度見越し検査というのは私の恩師の北村先生が先生の東北大での後任になる丸山欣哉先生の協力で考案した運転者の適性検査で、今は運輸省の標準的な検査の一つになっています。当時はまだその検査の妥当性や信頼性について、あまりデータが蓄積されていなかったもので、私のデータもその一つとして貢献できればいいと考えていました。詳細は省略しますが、運転というパフォーマンスに、眼球運動やまばたきなどの視線の作法というか眼の配り方のようなことが大いに関係することなど、極めて興味深い結果を得ました。瞬目は、他にも文献を調べると、少なくとも心理学の中ではほとんど注目を浴びた時代はないが、どうも心理学的な研究の重要性はかなり古い時代の生理学者が指摘しているにも拘らず、その後その割にはあまり組織的な研究がないことが分かりました。それに、研究テーマを選ぶのに自分に適したテーマを選ばないといけないのですが、まばたきなら、大規模な装置も大規模なスタッフの必要なく、田舎大学で一人静かにできるテーマとして最適だと感じました。研究者を志したのですから、小なりといえども、世界に発信できる可能性も多少は追求していましたから、その意味でもその可能性が

ないわけではないとも考えたのです。大学院大学の教授のように手足がたくさんある大学の教師ではありませんでしたから、一人でできるテーマとしては格好のテーマに思えたのです。ユングは無論一番難物でしたが、肢体不自由のテーマも割に早期に始めましたからやっていたらあるいは成功したかもしれません。しかし、色んな条件がこのまばたき研究に収斂させていきました。こうして、その後の私の半生の生き方を決定づける契機になりました。その後、30年間の間に、このテーマで文部省の科研費や私学助成などを5～6回もらいましたので、それも励みにもなりました。

その後、福島医大の残りの時間、秋田大学、東北学院大学、白鷗大学とすべての時代を通じての私の主旋律になりました。そのきっかけの一つに、関西学院大学の山田富美雄先生と佐賀大学の福田恭介先生との邂逅があります。特に山田先生とはある時の日本心理学会で塚原先生と助教授の斉藤進先生（現日本人間工学会会長）との共同研究のまばたきの発表を聞いて、声をかけてくれたのがきっかけです。関西学院大学とはその後深いつながりができますが、この山田先生のご縁です。元々関西学院大学にはまばたき研究の日本のメッカみたいところがありました。つまり、反射性瞬目の条件づけの研究では日本をリードしていました。その延長線上に自発性瞬きの研究が位置づけられたのでしょうか。先生には随分お世話になりました。1991年には北大路書房から我々3人で編集した「まばたきの心理学」が出版されますが、これも彼の世話です。世界でも類例のない本なのです。まばたきが本になるとは思いもしませんでした。それを彼はやってのけるのです。そして、この3人の周りにはその後次第に自発性瞬目に興味を持つ人たちが集まり始めて、ついには「まばたき研究会」が発足し、最近では日本心理学会の下部組織になっています。

私のまばたき研究は、秋田大学の最後の頃（1998年）に縁あってアメリカ・セントルイスのWashington University in St. Louisという有名な私立大学のスターン先生の研究室に在外研究が許されることで、さらに弾みがつきました。アメリカ大陸のほぼ真ん中にあるセントルイスで、この大学

にはノーベル賞学者もかなりいました。そして、同じ学部に通大出身の日本人でコウモリのコミュニケーション研究で有名な人もノーベル賞候補だと言われる人がいました。スターン先生は、無論、眼球運動・瞳孔・瞬目など動眼系の大家で、特に瞬目に関しては当時心理学者としては最大のBig Nameでした。先生とはその後も連携した研究仲間になると同時に、まばたき研究の最新の情報と最先端の研究者と親交を結ぶ際のフィクサーとして、私たち日本人の研究者に実に親切に終始接してくれています。1998年の春には私の研究室に文部省の資金で2ヶ月ほど滞在されたこともあります。その時と相前後して、先の福田先生もここに留学され、多くを学ばれたようですが、私などは特にその研究の姿勢に教えられています。85歳の今は、残念ながら、去年の春から病を得て、闘病生活を送っておられますから、今までと同じペースというわけにはいきませんが、83歳の一昨年にも現役の教授で、いつもの学会ではシンポジウムをご一緒させてもらったのが一番最近の出来事です。その時の年齢を忘れてしまうほどのその精力的な活動に驚嘆すること仕切りでした。それまでも、毎年学会では、若い人たちのポスター発表に一人ずつコメント入れるほど熱心に研究活動をされるすごい気力の持ち主です。私には大恩ある一人です

この後、まばたき研究の成果を報告すべきですが、かなりの量になりますので、省略いたします。2月8日の最終講義でも時間がなくてほとんど割愛しましたが、大要をかいつまんで述べれば次のようになります。1978年が最初の論文でしたが、その後20年くらいは実験心理学的研究がほとんどでした。テレビ番組評価から始まって、速度見越し事態、催眠下のまばたき、心的負荷、快不快刺激、課題要求、内的注意と外的注意、暗所視と明所視、視認性、などとの関係を検討したのです。そのうちにどうも再現性の低さ、つまり、追試をやっても時に同じ結果を得られないことがあることに気がつき始めます。と同時に、モデルの構築がうまくいかない、つまりどんな条件で一貫してまばたきは減少し、あるいは増加するか、という原理が見いだせない。何かやればそれなりに結果は出るが、一貫性に

欠ける、ということが気になりだし始めました。特に、学位論文で扱った速度見越し事態をディスプレイ上に再現して再検討をした時に、正確な再現性に欠けたことにショック受けて、その後はこの原因を個人差に求めることになり、主に差異心理学的な研究に移って10年を経過しています。東北大看護の杉山敏子先生との共同で3か月児から93歳の高齢者の1400人を超えるまばたきのデータを収集して発達過程を検討し、同じ問題意識で、京都大学霊長類研究所に通って、霊長類70数種のまばたきも記録しました。後者は仁愛大学の森滋子先生、岡山大学の広川空美先生、名古屋大学の大平英樹先生、それに京大霊長類研究所の友永雅己先生との共同研究です。いずれにしても、やればやるほど分らなくなる、というのが今の私の実感で、まぶたの開閉だけという極めて単純な問題なのに、どうしてこれほどたくさんの要因が複雑に絡みあっているのか、「神の御業」を感じざるを得ない、という心境です。

さて、最後に締めくくります。今まで接してきたたくさんの学生から卒業の時などにしばしば色紙を求められることがありましたが、どうも気取らずかしくて、一度も書いたことがありません。しかし、今はこれで教師生活もすべて終わりというので、思い切ってその締めくくりに一言を贈りたいと思います。それは、ワーズワースの「暮らしは低く、思いは高く」(William Wordsworth "Plain living, high thinking")という言葉です。経団連の元会長土光敏夫さんの座右の銘としてもつとに知られた言葉ですが、「清貧の思想」の一つです。土光さんはあれだけのお金持ちなのに朝食のおかずは目刺しだったということだそうです、ことほど左様に、質素な生活を旨とするが、精神的にはいと高きもの・ところを目指そう、ということ。高校生の頃この言葉を先生から教わって、とても感動し、今も一番好きな言葉なのです。ただ、日本語では高い精神性を含意する「思い」が英語でみると"thinking"なのがやや気になっています。日本語訳の方がずっと格調高いと思っております。しかし、天下のワーズワースがヘマな英語を使うとは思えないですから、私の英語の力が不足していると考えた

方が妥当なのでしょうが、この場合の「思い」というのは上田敏のこの訳が傑出していると同時に、大学時代の我が師がしばしば口にしたドイツ語の"Sehnsucht"（憧憬・あこがれ）という言葉の方を連想します。「真理への憧憬」という使い方ですから、上の「思い」にはこの方がずっと似合っているようにも思えます。如何でしょうか。

いずれにしても、心理学を卒業してもお金に縁がある生活はあまり望めませんから、質素な生活を覚悟する代わりに、「高い理想あるいは高い志あるいは高い精神性」を目指して、一人一人が豊かな人生を送って欲しいものと陰ながら祈っております。